

## 増上寺徳川家霊廟の風景（7）

### 文昭院の灯籠配置について(上)

文昭院の灯籠配置については所沢市教育委員会によって『狭山山不動寺所在銅燈籠調査報告書』が刊行されたのを機に「(5)の北霊廟の唐金灯籠」で詳しく報告をさせて頂いた。

しかしその後京都にお住まいの高木七郎太氏が画家長澤蘆雪の墓所を尋ねて京都市上京区の回向院を訪れた際に、文昭院と記銘された銅灯籠を見付けられご連絡を頂いた。高木氏の報告によりこの銅灯籠には

古河城主  
従四位下侍従兼中務大輔  
藤原朝臣本多忠良

の銘があり、しかも昭和26年に修復されてこの回向院に献納されたことが判った。私も早速現地に向かい確認して来たが、増上寺の銅灯籠は昭和32年に西武が一括して狭山の不動寺へ移して管理していたと考えて居ただけに、それ以前に1基の灯籠が京都に運ばれていたことは驚きであった。つまり今迄確認されて報告されていた約80基の灯籠の他に増上寺から西武の手を経ずに移されていた灯籠があったことになる。やはり京都にお住まいの難波謙一氏が回向院灯籠の追跡調査を行い、兵庫県朝来市の金蔵寺に別にもう1基の灯籠が存在することを突き止められた。

越州高田城主従五位下  
因幡守源姓松平氏定達

の銘が確認されている。この2基の灯籠は難波氏の聞き取り調査により同じ経緯で増上寺から移された物で有ることが判っている。

さてこの灯籠だが(5)で紹介した昭和22年撮影の米軍航空写真(次頁写真3)では回向院の灯籠はA群に、そして金蔵寺の灯籠はC群に属している。矢印でそれぞれの所在を示しておく。

灯籠の残存状況については後でもう一度整理してみたいと思う。

もう一つ大きな発見があった。古書店の目録に写真入りで紹介されていた『増上寺 文昭院殿御霊屋前銅燈籠併石燈籠建場之繪圖』(以下『文昭院建場図』)の所在を知りたいと思っていたが、港区の郷土資料館が所蔵していたことが判り、しかも昨年の11月に同館で開催された増上寺徳川家霊廟展に展示され、図録にも写真が収録された。

早速図録に収載された写真から大名の名前を確認し、1、2を除いてほぼ確定することが出来た。『文昭院建場図』に基づいて作成した銅燈籠の配置図を5頁に掲載したので適宜参照されたい。

幾つかの事実が判明した。『文昭院建場図』は上杉家によって写された物で有ることである。銅灯籠の奉献大名名を確定していくうちに最後まで「上杉民部大輔吉憲」の名を見付けることが出来ず、その代わりに「御当家様」という記載が有ることが判った。もう一つは、大名名の記載に脱落が有り、これが吉田邸に残されている松平越前守信清のもので有ることも判った。石灯籠にも記載の誤りが有るが、何れにしても写本であることは間違いなく「上杉本」と呼ぶのが相応しい物と思われる。上杉家が所蔵していたか、或いは宿坊となっている子院が所蔵していたものか。

灯籠の総数については少し訂正しなくてはならない。前回(5)の中で私は神田の古書店の目録の写真から灯籠の基数を

石燈籠	1基献納大名	150名	150基
	2基献納大名	40名	80基
銅燈籠	1基献納大名	27名	27基
	2基献納大名	55名	110基
			計367基

と推定したが、港区の図録から改めて推計すると

石燈籠	1基献納大名	152名	152基
	2基献納大名	40名	80基
銅燈籠	1基献納大名	28名	28基
	2基献納大名	55名	110基
			計370基

となり、『戦災等による焼失文化財』の中の文昭院の焼失状況の項に



写真1 回向院銅燈籠



写真2 金蔵寺銅燈籠(難波氏撮影)

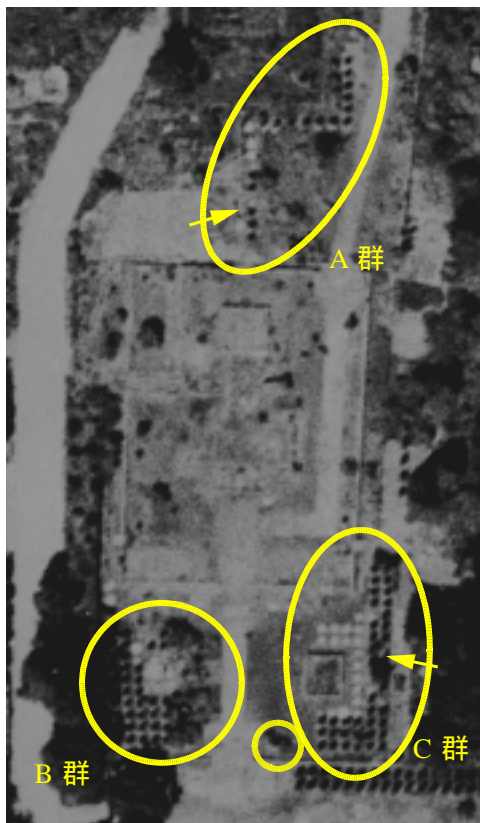


写真3 昭和22年撮影航空写真

は「なお附指定を受けていた銅燈籠百三十八基のうち九十八基は焼失をまぬかれていたが、昭和三十二年移転によって原位置を離れることになったので、指定解除された。」とある記述に合致する。

ところでこの138基の銅燈籠の状態だが、大正5年3月に刊行された香取秀真の『日本金燈籠年表』には

芝増上寺文昭院廟銅燈臺百三十五基 正徳二、一〇

江戸鑄師三十一名

とあり、その2年前に刊行された同氏の『日本鑄工史稿』には不明2基を含めて135基分の奉獻者名が鑄物師別に記載されている。同じく香取が昭和27年6月に私家版として刊行した『江戸鑄師銘譜』には有章院、惇信院に奉獻された銅燈籠が追補されるが、実は文昭院の燈籠は133基に減ってしまう。両者の異同を調べてみた所『日本鑄工史稿』の「宇田川善兵衛重賢」の項では

芝増上寺文昭院廟前銅燈籠兩基 土佐守源豊隆獻納、

正徳二年十月十四日 鑄物師宇田川善兵衛

同上 備前國主源綱政獻納、(同上)

と記載されているが『江戸鑄師銘譜』では、この2名分のデータの間には有章院銅燈籠のデータも含めて3行分追加されていた。つまり追補の際にデータが誤った場所に挿入されてしまった為に文昭院銅燈籠が有章院の銅燈籠と見なされる結果となってしまったのだ。となると大正の初めの時期には135基が存在し、既に3基の燈籠が失われてしまったのであろうか？

そのことにお答えする前に、燈籠の所在を読み解く為にどんな作業が必要なのかを考えて頂きたい。まず何よりも『文昭院建場図』に書き込まれた大名の名前を一つ一つ確定していかなければならない。古文書の読解に習熟した人ならば何でも無い作業も、私達にはかなりの苦行となる。

しかも一人一人の受領名、官位・官職をきちんと把握しておかないと、とんでも無い人物を登場させてしまうことになる。結構大変な作業だが実はこの作業が面白いし後でとても役に立つ。今回の作業では『東叡山御燈籠建場図』(東京国立博物館蔵)を読み解く時に作成した資料がそのまま使えたので文庫作業は比較的楽であった。何故なら常憲院徳川綱吉が亡くなったのは宝永6年(1709年)正月10日で、文昭院徳川家宣が亡くなった正徳2年(1712年)10月14日から僅かに4年前のことに過ぎない。この4年間の大名の異同を明らかにすればとんでもない幽霊を作り出さずに済むことになる。この間の異同は『徳川実紀』のうち「文昭院殿御実紀」によってほぼ辿ることが出来るし『武鑑』も有力な手段となる。後は『寛政重修諸家譜』を使って確認すればほぼ作業は終了したと言って良い。『徳川実紀』も『寛政重修諸家譜』も少し大きな図書館には置いてあるし、活字本なので私達にも利用しやすい資料だと言える。

今回文昭院の銅燈籠の奉獻大名を確定する際に最後まで残ったのが「松平出羽守清武」であった。宝永6年当時は上野館林藩2万4千石の当主で宝永4年12月に従四位に叙任している。徳川家宣の弟で常憲院の靈廟にも銅燈籠1基を奉獻している。四代將軍家綱の弟で館林宰相と言われた綱吉と、その兄であった甲府宰相綱重の子綱豊(後の家宣)はそれぞれ神田御殿、桜田御殿を江戸に構えて、將軍継嗣に際してはこの二つの屋敷の家臣団が幕府の枢要に入っていく。その様子は深井雅海の『徳川將軍権力の研究』に詳しいが、いづれにしても家宣の弟の清武は松平の姓を名乗って大名に列する。亡き家宣と血筋としては一番近い清武の燈籠がどの様な位置に据えられるのか少し興味が有った。

ところで清武の出羽守であるが小川恭一の『江戸幕府大名家事典』の出雲松江藩の記述の中にお誂え向きに次の様な説明がある。

「世間では当家(出雲松江藩)の当主を、封地にちなみ雲州侯と呼んでいるが、名前は松平出羽守である。代々家督時にほぼ独占的に松平出羽守を称している。一姓一官名のルールがあるので、他の松平姓の人が出羽守を名のることはないが、宝永から享保の初めに、家宣の弟(越智)の清武が松平出羽守を名のっている。越智清武は元禄15・12・28に従五位下下總守を叙任し、宝永4・1・11に松平姓を賜った時に、松平下總守を称することができなかった。当時、備後の福山城主・松平下總守忠雅(のち忍侯)が存在し、清武が松平姓となると、すでに使用されている下總守を用いることができず、当時あいていた松平出羽守を称することになった。これは松江侯であった松平出羽守吉透が宝永2・9・6に逝去し、当主は幼少の莊五郎直郷(後の宣維、当時10歳)で、出羽守があいていたから可能であった。宣維が年齢に達し、叙任の5日前に清武は出羽守から兵部大輔に改めていたので、本来の松平出羽守は支障がなかった。」

ケーススタディとしてももう少し松平清武について一緒に見て頂きたい。『寛政重修諸家譜』から関連の部分を書いておく(正徳)二年二月十六日兵部大輔に改む。(略)九月文昭院殿御違例により、清武父子屢々出仕して御気色をうかがひ、御なやみ重らせ給ひては昼夜となく御寢所に候し辱き御遺命をかうぶる。十一月十五日有章院殿に拝謁しけるついで印籠を賜はり、二十九日文昭院殿の御遺物近景の御刀を賜ふ。十二月十二日文昭院殿御遺命によりて越後國岩船蒲原両郡の内にして二萬石をくはえられ、すべて五萬四千石を領す。三年十二月十九日右近將監にあらたむ。」



	文昭院建場図	江戸鑄師銘譜	現存銘文	不動寺
勅額門内左右	松平加賀守	加賀能登越中三國主 參議從三位菅原朝臣綱紀奉獻	加賀能登越中三國主 參議從三位菅原朝臣綱紀	9 10
拝右1	松平淡路守	阿波淡路兩國主源綱矩獻納	阿波淡路兩國主 從四位下侍從源朝臣綱矩	21 22
拝右2	酒井雅樂頭	前橋城主酒井親愛獻納	前橋城主 雅樂頭源朝臣酒井親愛	45 46
拝右3	真田伊豆守	信州河中嶋城主滋野姓真田幸道獻納	信州河中嶋城主 從五位下伊豆守滋野姓真田氏幸道	37
拝右4	南部大膳亮	奥州盛岡城主南部氏信應獻納	奥州盛岡城主 從五位下大膳亮源姓南部氏 信應	73
拝右5	稲葉丹後守	下總佐倉城主稲葉氏越智宿禰正知獻納	下總國佐倉城主 從五位下行丹後守稲葉氏 越智宿禰正知	51
拝右6	酒井修理大夫	若狹國主酒井忠高獻納	若狹國主 從五位下修理大夫酒井氏 源忠高	52 66
拝右7	松平因幡守	越州高田城主松平定達	越州高田城主從五位下 因幡守源姓松平氏定達	金藏寺
拝右8	本多信濃守	郡山城主藤原忠直獻納		
拝右9	大久保大蔵少輔	相州小田原城主大久保忠英獻納	相州小田原城主 從五位下藤原朝臣 加賀守大久保忠英	55
拝右10	岡部美濃守	泉州岸和田城主岡部長泰		
拝右11	戸田能登守	獻納者不明に該当か？		
拝右12	脱落か？	松平越前守藤原朝臣信清獻納	從四位下行矢田侍從松平兼越前守 藤原朝臣信清	吉田邸
拝右13	松平肥前守	筑前大守源宣政	筑前大守 從四位下侍從源朝臣宣政	50 57
拝右14	黒田豊前守	下館城主丹治真人直重獻納	下館城主 從四位下行豊前守丹治真人直重	49
拝右15	堀田伊豆守	羽州山形城主堀田氏紀正虎獻納		
拝右16	戸田采女正	大垣城主戸田氏定		
拝右17	酒井左衛門佐	出羽庄内城主酒井忠真獻納	出羽庄内城主 從四位下左衛門佐酒井氏源忠真	71
拝右18	丹羽左京大夫	奥州二本松城主丹羽尹重獻納	奥州二本松城主 從四位下左京大夫藤原朝臣丹羽氏尹重	15 16
拝右19	松平左衛門督	源朝臣直常獻納	左兵衛督從四位下源朝臣直常	
拝右20	立花飛騨守	筑後國柳河城主立花宗政獻納	筑後國柳河城主 從四位下飛騨守 源姓立花氏宗政	35
拝右21	松平伊賀守	信州上田城主松平忠榮獻納	信州上田城主從四位下侍從 兼伊賀守源朝臣松平忠榮	54
拝右22	松平伯耆守	遠江國浜松城主松平宗俊獻納		
拝右23	小笠原右近將監	小倉城主藤原忠雄獻納	小倉城主 從四位下侍從兼右近將監源朝臣 小笠原忠雄	36
拝右24	松平越後守	美作國津山城主松平宣富獻納	美作國津山城主 從四位下行左近衛權少將 兼越後守源朝臣松平 宣富	47 48
拝右25	松平摂津守	松平義行獻納		
拝右26	松平甲斐守	甲斐國主松平吉里	從四位下侍從甲斐國主 源朝臣松平吉里	68
拝右27	細川主税頭	肥後國主細川宣紀獻納	肥後國主 從四位下行侍從兼主税頭 源朝臣細川宣紀	58
拝右28	阿部備中守	備後福山城主阿部正邦獻納		
拝右29	有馬蕃頭	筑後久留米城主村上姓有馬氏則維獻納		
拝右30	藤堂和泉守	伊賀國主藤堂和泉守高敏獻納		
拝右31	松平大和守	奥州白河城主松平基知獻納		
拝右32	松平右衛門督	因幡伯耆兩國主源朝臣吉泰獻納		
拝右33	松平薩摩守	薩摩大隅日向三國主兼領琉球國 從四位上左近衛中將兼薩摩守源朝臣吉 貴獻納		
拝右34	松平大学頭	大学頭賴貞肅具		
拝右35	松平丹後守	肥後國主藤原吉茂獻納		
拝右36	松平兵部大輔	獻納者不明に該当か？		
拝左1	織田越前守	織田氏平朝臣信久獻納	從四位下小幡侍從織田氏越前守 平朝臣信久	56
拝左2	松平大炊頭	越前福井城主吉邦獻納	越前福井城主 從四位下侍從源朝臣吉邦	25 26
拝左3	松平中務大輔	松平昌平獻納	從四位下行中務大輔松平氏源朝臣昌平	62
拝左4	毛利又四郎	大江姓毛利又四郎元朝獻納	大江姓毛利又四郎元朝	61
拝左5	伊達伊織	伊豫國宇和島城主伊達伊織宗貞獻納	伊豫國宇和島城主 伊達伊織藤原朝臣宗貞	29 30
拝左6	土岐伊豫守	土岐頼殷獻納	從四位下伊豫守源姓土岐頼殷	76
拝左7	松平越中守	松平定重	從四位下越中守源姓松平氏定重	63
拝左8	松平市正	収載されず	從四位下源朝臣直明	74
拝左9	稲葉内匠頭	稲葉氏越智宿禰正往獻納	從四位下行侍從兼内匠頭稲葉氏越智宿禰正往	
拝左10	小笠原佐渡入道	小笠原長重獻納	前從四位下侍從兼佐渡守入道 源朝臣小笠原長重	67
拝左11	酒井勘解由	酒井忠學獻納	從四位下前左近衛少將 源朝臣酒井忠學	65
拝左12	松平保山	甲斐國主松平吉保獻納	從四位下行左近衛權少將 前甲斐國主源朝臣松平吉保	69
拝左13	細川越中守	細川綱利獻納		
拝左14	松平上総介	藤原朝臣綱村		
拝左15	御當家	米澤城主吉憲獻納	米澤城主從四位下侍從 兼民部大輔藤原朝臣吉憲	1 2
拝左16	松平播磨守	播磨守頼明肅具	從四位下行侍從兼播磨守頼明肅具	

松平清武の受領名の変遷を整理してみる。  
宝永4年11月 松平出羽守  
正徳2年2月 松平兵部大輔  
正徳3年12月

松平右近將監

ところで、献納する大名の官と姓名は何時の時点のものが使われるのであろうか？

九州国立博物館の「対馬宗家文書データベース」の中に次の様な(老中)書付が有る。Webで検索が出来るので是非写真で確認して頂きたい。惇信院徳川家重の霊廟の前に銅燈籠を献ずるように命じた書付で以下の様である

増上寺

惇信院様御霊前江

銅燈籠可被献之候

寸法之儀者

有章院様御仏殿江

被献候通可被心得候

右来年二月上旬迄

出来候様可被致候

以上

八月

宗対馬守江

惇信院は宝暦11年6月12日に亡くなっている。書付は八月に出され明年の2月まで有章院殿に献納したのと同じ寸法の銅燈籠を献納することを求めて居る。従って書付通りなら惇信院が亡くなってから8ヶ月後に霊廟の前に灯籠が献納されたことになる。

文昭院についても献納の状況はほぼ同じであったと考えられる。

御三家の一つ尾張徳川家の吉通は正徳3年7月江戸藩邸で急逝する。その後8月に五郎太が3歳で継ぐが10月には驚風で亡くなってしまふ。文昭院殿に奉獻されたのは正徳2年10月には存命であった吉通ではなく徳川五郎太である。

同じく正徳3年5月には陸奥梁川藩の松平出雲守義昌が亡くなり右近將監義方が襲封する。奉獻された灯籠の銘は松平右近將監義方である。義方は同年12月に出雲守になり松平清武が右近將監を襲

	文昭院建場図	江戸鋳師銘譜	現存銘文	不動寺
拝左17	松平長門守	越中富山城主松平利興獻納	越中國富山城主從四位下 菅原姓長門守松平利興	27 28
拝左18	榊原式部大輔	姫路城主源政邦獻納	姫路城主 從四位下侍從兼式部大輔源朝臣政邦	11 12
拝左19	松平隱岐守	伊豫國松山城主松平定直獻納	伊豫國松山城主從四位下侍從 隱岐守松平氏源定直	17 18
拝左20	松平右京大夫	越州村上城主松平輝貞獻納	越州村上城主從四位下侍從 兼右京大夫源朝臣松平輝貞	72
拝左21	松平出羽守	出雲國主松平宣澄	出雲國主 從四位下侍從兼出羽守源朝臣松平宣澄	13 14
拝左22	松平左京大夫	収載されず	從四位下行左近衛權少將松平左京大夫源賴致	59 -
拝左23	松平伊豫守	備前國主源朝臣綱政	備前國主 從四位下行左近衛權少將源朝臣綱政	31 32
拝左24	松平右近將監	松平義賢獻納	從四位下行侍從兼右近衛將監 源朝臣松平義賢	64 -
拝左25	松平土佐守	土佐守源朝臣豐隆獻納	從四位下行侍從兼土佐守 藤原朝臣豐隆	41 42
拝左26	佐竹大膳大夫	秋田城主佐竹義格獻納	秋田城主 大膳大夫從四位下兼行 侍從源朝臣佐竹義格	43 44
拝左27	松平安藝守	安藝國主(云々)吉長獻納	安藝國主 從四位下侍從源朝臣松平吉長	40
拝左28	松平民部大輔	周防長門兩國主大江吉元獻納		
拝左29	宗對馬守	對馬國主平朝臣義方獻納	對馬國主從四位侍從 平朝臣義方	70
拝左30	松平陸奥守	陸奥守藤原朝臣吉村獻納	從四位上行左近衛權中將兼陸奥守藤原朝臣吉村	7 8
拝殿前	水戸中納言殿	權中納言從三位源綱條肅具		
拝殿前	紀伊中納言殿	紀伊國主權中納言源吉宗獻納		
拝殿前	徳川五郎太殿	尾張國主徳川五郎太		
奥1	松平紀伊守	収載されず	從四位下行侍從兼紀伊守源朝臣松平信庸	60
奥2	内藤豊前守	内藤式信獻納		
奥3	久世大和守	關宿城主久世重之獻納		
奥4	本多中務大輔	古河城主本多忠良獻納	古河城主 從四位下侍從兼中務大輔 藤原朝臣本多忠良	回向院
奥5	阿部豊後守	忍城主阿部正喬奉獻	忍城主 從四位下侍從兼豊後守 阿部朝臣阿部正喬	23 24
奥6	間部越前守	高崎城主間部詮房奉獻		
奥7	井上河内守	笠間城主井上政岑獻納		
奥8	秋元但馬守	川越城主秋元喬知奉獻	川越城主 從四位下侍從兼但馬守藤原朝臣 秋元喬知	38
奥9	土屋相模守	土浦城主土屋政直獻納	土浦城主 從四位下侍從兼相模守 源朝臣土屋政直	34
奥10	松平下総守	桑名城主松平忠雅獻納	桑名城主 從四位下左近衛少將 下総權守源朝臣 松平忠雅	33
奥11	松平讃岐守	高松城主源朝臣賴豐獻納	讃州高松城主從四位下行左近衛 權少將兼讃岐守源朝臣賴豐	19 20
奥12	松平肥後守	肥後守源正容獻納	會津城主 正四位下行左近衛中將兼肥後守源正容	39
奥13	井伊掃部頭	江州彦根城主井伊直該獻納	江州彦根城主 正四位上左近衛中將兼掃部頭藤原朝臣井伊直	53 75

う。  
松平姓の場合、受領名を動かせば玉突き状態で変わってしまう。調整には細心の苦勞があったのかも知れない。

結局松平清武は『文昭院建場図』に有る様に松平兵部大輔の名で銅灯籠を奉獻したと思われる。思われるというのは、『文昭院建場図』に名前はあっても香取秀真の『江戸鋳師銘譜』にも採録されておらず、勿論現物も残っていないので確かなこととしては言い得ないということである。

しかし御三家の銅燈籠よりは少し手前、国持ち大名の燈籠群からは1歩前にある位置は、前將軍の弟、現將軍の叔父の位置としては絶妙な場所に据えられているとも言える。

さて松平清武を例に灯籠の奉獻大名を確定していく作業の一端をお見せしたが、ここからは『文昭院建場図』から判明した奉獻大名名、『狭山山不動寺所在銅燈籠調査報告書』(以下『狭山報告書』)によって確認された灯籠銘文による奉獻者名をリストアップして、『江戸鋳師銘譜』の時期までに何が失われ何が不明となっていたのかを考えてみたい。

本当はこの種の論考で余り表を使った考察をしたくないのだが、しかし下地として

沢山のデータを作りそれを元にお話ししているので、余りデータを省いてしまうと一方通行になってしまう恐れもあるので簡略化してご紹介したい。

表の左端の番号は『御建場図』を元に筆者が便宜的に付けた物。その右の名称は『文昭院建場図』の中の大名名、3列目は『江戸鋳師銘譜』に補正を行ったもの。4列目は『狭山報告書』を元に現存3基の灯籠を加え補正を行ったもの。

右端の数字は前記報告書の中の整理番号で、「吉田邸」「回向院」「金蔵寺」は不動寺以外の判明した所在地名である。

実は『狭山報告書』の刊行が手間取っている間に、私は母校の早稲田大学大学資料センターに堤康次郎関連の文書が所蔵されていることを知った。目録によればその文書の中に『ユネスコ村所在(狭山)唐金燈籠目録(八拾基)』が有ることがわかり、『狭山報告書』の調査をされた石塚氏にお願いして資料の撮影をして頂いた。縦罫線紙の表題の欄外には「修理指導者筑紫忠門氏 国会議事堂(建築)物指導者」と書かれている。

内容は1行おきに不動寺に所在する銅灯籠80基の配置番号、年号、銘文、鋳物師名が記載されている。例えば

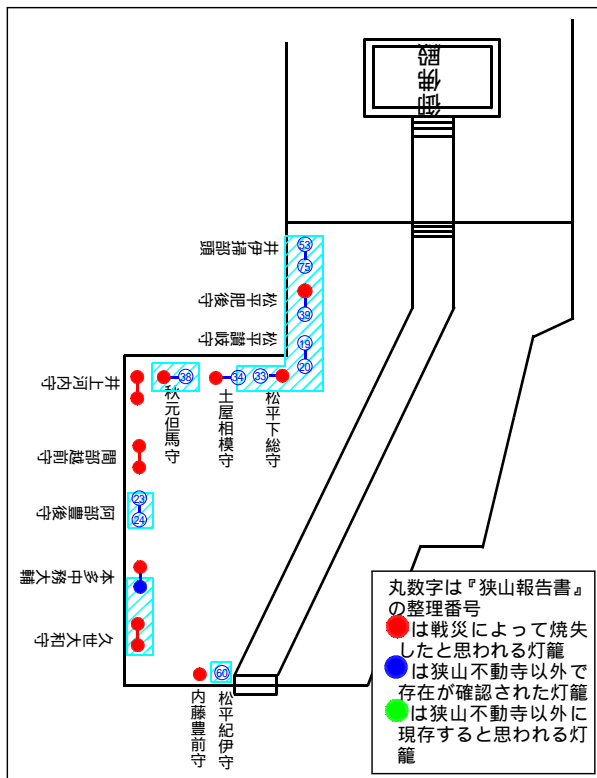
35 正徳二年壬辰十月十四日  
桑名城主從四位下左近衛少將下総權守源朝臣松平忠雅 粉河丹後掾宗敏  
の様に記載されている。

この記述により欠落している表の一部を補う事が出来る。

拝左22の松平左京大夫と拝左6の松平市正それに奥1の松平紀伊守である。

拝左22の松平左京大夫に関しては『狭山報告書』の中で石塚氏も考察しているように伊予西条藩の松平左京大夫頼致で間違い無いと思われる。拝左6の松平市正と奥1の松平紀伊守の灯籠は狭山山不動寺に存在するので、香取の採録時に何故脱落してしまったか不思議でならない。



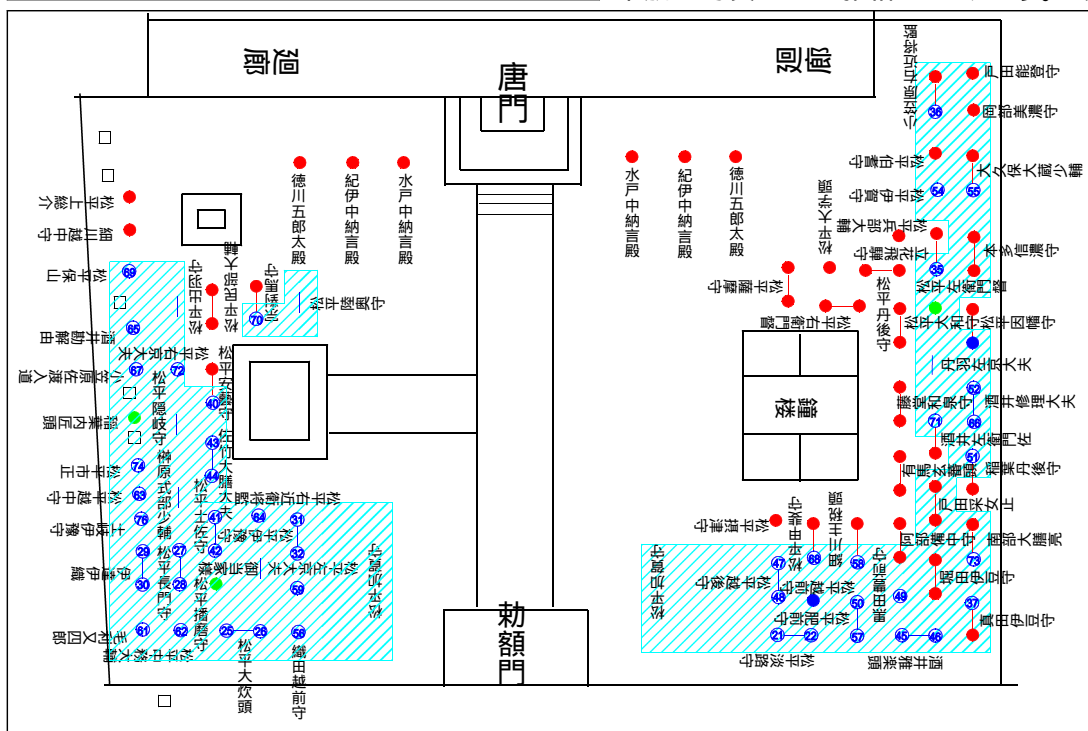


『江戸鑄師銘譜』で採録されなかった奉獻大名の内、3名の名前は確定することが出来た。後の2名は拜右11の戸田能登守と拜右36の松平兵部大輔清武だけである。手掛かりとして残されているのは香取秀真が不明とした2基に関する記述だけである。

不明とされた銅燈籠の鑄物師は池谷宮内正直と堀山城大掾藤原清次である。

池谷宮内正直に関しては4年後の正徳6年に下野宇都宮城主戸田忠真の灯笼を製作していることが判るので文昭院に関しても戸田忠真の物で有る可能性が高い。さて、堀山城大掾藤原清次だが宝暦十一年六月の惇信院殿へ献納の松平武元の銅灯笼を製作している。松平武元は清武の2代後の越智松平の当主であるからここでも鑄物師と大名家との結びつきから清武のものとするのが良いと思われる。そして何よりも先の不動寺にある3基の灯笼銘は今までも明瞭に読み取ることが出来るので(松平左京大夫のものは現在損壊しているが、移設当時には読み取れていたことが堤康次郎の資料から判る)献納者不明というのは考えられないことである。つまり基数について言えば戦災によって被害が及ぶまで、2基が献納者が不明になる程度の損壊を受けてはいたが、138基がそのまま残されていたことになる。何故3基の灯笼銘が収載され無かったかは判らない。

戦災によって焼失した燈籠の基数を昭和22年撮影の米軍航空写真により推計してみよう。『文昭院建場図』の灯笼



のうち、航空写真から存在を確認出来ると思われるものに網を被せてみれば、失われてしまった灯笼が明らかになってくる。図の中に附した番号は『狭山報告書』にある整理番号である。唐門前に配された灯笼114基のうち32基が失われたことになる。

拜殿から奥院へ向かう中庭に据えられた灯笼の残存状況は写真からは判りにくい。7基程度が損壊したと思われる。ただ、本多中務大輔の灯笼について追跡調査をされた難波氏に依れば、回向院と金蔵寺の灯笼はともに

文昭院奥院前内庭及び拜殿前の灯笼配置図(『文昭院建場図』より筆者の責任に於いて作製)

損壊した灯笼の使える部分を集めて修復したということなので、A群、C群ともに写真では立っているように見えても状態の悪いものがかかりあったと思われる。

いずれにしても昭和22年時点で唐門前で33基、奥院前で7基が失われていたと推計すれば98基が残存していたものと思われ『戦災等による焼失文化財』にある98基の残存と合致する。なお、入間市の金子地区文化協会の栗原氏のご紹介でお話を聞いた西武関係者のお話でも堤康次郎は先に紹介した『ユネスコ村所在(狭山)唐金燈籠目録(八拾基)』を作らせ手元に置いていたと思われるので、銅灯笼が西武の所有になった時にはすでに八十基にまで整理されてしまっていたものと思われる。

尚、『ユネスコ村所在(狭山)唐金燈籠目録(八拾基)』には2ヶ所に印が附されているが、その印の附された2基の灯笼は今不動寺に存在していない。

從四位下行侍從兼播磨守頼明肅具  
 從四位下行侍從兼内匠頭稻葉氏越智宿祢正往

の2基である。

他に

左衛門督従四位下源朝臣直常

の灯籠が確認されて居らず、おそらくどこか西武関連の施設に移された物と思われる。

昭和46年11月に刊行された『高輪美術館蔵品目録』は誤植や脱落も多いので明確なことは言えないが印の付いた2基は記載されていないのでこの前に移された物と思われる。前にも紹介した大磯の吉田茂邸七賢堂前の銅灯籠と松平左衛門督直常の銅灯籠はこの目録に名があるので、この時期以降に移されたことが明確である。

此処まで来て紙数が尽きた。石灯籠を含めてどの様に灯籠が配置されていたかについては次稿に譲りたい。